

健康文化

がん告知と向かい合う

神里みどり

昨年、私の主人が前立腺がんの宣告をうけた。がんが発見されたときはすでに進行がんで手術の適応ではなかった。2年前から主人は尿が出にくいとか、性器の様子が変だとか訴えがあったが、私の仕事の多忙を理由にそのまま放置していた状態が続いていた。主人から一緒に病院へ行ってくれと言われていたが、前述の理由で連れて行くのがのびのびになってしまっていた。そもそもなぜ私と一緒にいって行かなければいけないかであるが、私の主人は米国人なので日本語が話せない。日本にきて早14年になろうとしているのに、日本語が未だ話せないことは他の日本人から見ると稀有にうつるらしい。日本語が話せないのは「おまえのせいだ」などどいつも私を非難していたが、私は今でも自分のせいだとは思っていない。全く日本語がわからない主人に日本語で話すのは一苦労だし第一面倒くさい。いちいちこれはこういう意味でという説明をつけなければならないからである。語学は自分で習得するものだというのが私の持論である。よって、ついつい英語でしかコミュニケーションをとってこなかった生活が続いていた。そのような事情で夫は日本語が話せないために病院探しからすべて私にゆだねなければならない現状があった。

私自身まさか主人ががんだとは思っていなかったもので、まずは英語が流暢に話せる医師を探そうと思った。インターネットで名古屋市内の泌尿器科のクリニックを探してみた。その中で、米国の大学病院で講師経験があるという看板を掲げているクリニックがあり、すぐそのクリニックへアポイントをとることにした。血液検査の結果、どうもPSA（前立腺がんの腫瘍マーカー）の値が非常に高値ということで、別のクリニックの専門の医師を紹介してもらうことになった。腫瘍マーカーが高値だとしてもがんだとは言い切れないという2

名の医師の話に私自身も高をくくっていた。まさか、自分の夫ががんに罹患しているとは夢にも思ってもいなかった。

その紹介された医師からは、すぐに生検（腫瘍の組織をとってがん細胞かどうか調べる検査）を進められ、生検のために一泊2日の入院の指示が出された。やはり言葉の壁（看護師が英語を話せない）があるので私と一緒に付き添うように医師から言われたが、一泊2日と言えども子供たちだけの留守番はこれまで経験がないので非常に不安であった。そのことを医師に話をすると、その医師は特別室を用意してくれてそこに子供たちも一緒に泊まればよいと言ってくれた。そのときの言葉はとてもありがたく神の声に聞こえた。実際は上の娘（当時中学2年）が下の息子（小学3年）の面倒を見るので二人でも大丈夫だよと言ってくれたので、病院へ一家全員で泊まることはしなかった。

生検後の結果は、主人に話す前にまずは私の職場の方へ直接医師から電話を入れることになった。そのことは主人も承知で私から主人へ結果を伝えることになっていた。数日後のある日のこと、私の職場の方へ医師から電話があった。結果は進行性のがんで限局ではなく周辺組織に浸潤もしているとのこと、もはや手術は不可能であるとのこと。目の前が真っ暗になった。とっさに出た言葉は、それは「主人には言わないでください」であった。そのとき思ったのはこんな状況を主人に話したらかわいそうでもとも言えないと思ったからである。胸がつぶれる思いとはまさにこのことである。皮肉ではあるが、自分の主人ががんになるまで私はがん告知推進者であった。大学でもバイオエシックス論（医療の倫理のような講義）の授業の中でよく学生とがん告知についてのテーマで討論や講義などを行っていた。毎年この授業で必ず無記名のアンケート調査を学生に行い、その中でがん告知の是非について尋ね、そのデータを集計して、次回の授業へのディスカッションの材料として利用していた。ほとんどの学生（90%以上）が自分のがんに罹患したら告知してほしいという回答であった。しかし、家族ががんになったらという質問には、告知賛成派は半分以下になった。そのときは必ず学生に誰のための人生かを考えると告知をした方がいいかどうかという判断はおのずから導かれると説いていた。そう、人生の主役は患者自身である。がんという死の宣告に近い状況に立たされたとき、残りの人生は家族のものではなく、患者自身のもので、患者自身の生き方が最も重視され

るべきである。そのようなことをいつも力説していた。しかし、いざ自分がこのような状況に立たされた場合、自分の持論と全く正反対のことを口走っている。あまりのショックに冷静な判断がなされていなかったと言える。電話での医師とのやり取りは5分くらいで終わった。受話器を置いたとたん涙が滝のように私の頬を流れていった。「どうしていいのかわからない!」、混沌した状況が数分続いたのだろうか。医師から9時ごろ電話があることは主人は知っていて、彼はその結果を待っている。遠心分離機のようにいろいろなことがぐるぐる頭の中で回っていた。「いうべきかどうか……」。1時間もすると、少し冷静になったのか、「私が主人の立場だったら絶対に真実を知らせてほしいし、今後の自分の生き方についても考えたい、そうだ、やはり勇気をもって伝えよう」、そう確信した。医師からではなく自分の口から真実を伝えようと。その決断に至るまで2時間ほどかかったであろうか。私が考えあぐねている間、主人からは電話が一度もかかってこなかった。「きっと不思議に思っているのではないか。早く伝えよう」と午後の仕事は他の先生に頼み、自宅へ急いだ。

玄関を開ける前に一生懸命笑顔を作り何でもなかったように振舞おうと思った。「私を取り乱してはいけない、しっかりしなければ……」心の中で何度もつぶやいた。

玄関に入って廊下を横切ろうとしたときに主人がそそくさとでてきて、「どうだった?」と聞いてきた。一生懸命涙を見せないように「It' a cancer:がんだったよ」と何気ないそぶりで言った。しかし、その後、とても耐え切れなく「ごめんね、がんだよ、がんだよ」と涙声で伝えた。彼も大泣きをしていた。数分お互い手を取り合って泣いていたように思える。よく覚えていない。しばらくしてからか、突然彼は私をなじり始めた。「がんになったのはおまえのせいだ!」と。突然私めがけて怒りの言葉を発してきたのである。つまり私の愛情が足りなくてがんになったんだというようなことを口走っている。その言葉はとても信じがたい内容であった。と同時に思い当たることもいくつかあったようにも思える。私はその言葉をじっとたたずんで聴いていた。普段の会話であれば私も怒り狂って反論をしていたであろうが、なぜかそのときは冷静になれた。それは、死の受容についての理論をはじめてこの世に打ち出したキューブラロスの死にゆく人の5段階のプロセスを知っていたからであろうか。人間は死の

淵、あるいはそれとほぼ同じ状況に陥ったときに、人それぞれ段階は異なるとしてもどうも5段階の悲嘆のプロセスをたどるらしい。その5段階とは、①「ショック」、②「怒り：どうして自分が……」、③「取引：子供が卒業するまで生きていようとか」、④「抑うつ」、そして最終段階の⑤「受容」である。最後の「受容」だけは私の中では納得がいかない言葉であるが。まあ、それはさておき、怒りをぶつけているのはその相手ではなく自分自身への怒りであり、それをぶつけているのがたまたま目の前の人なのである。行き場のない怒りをぶつけるのはむしろ正常でそのプロセスをたどることは非常に重要な悲嘆のプロセスなのである。キューブラロスに死にゆく人々へのインタビューによってその5段階の悲嘆のプロセスを明らかにした。私の主人もまさにそのような状況であろうかと少し客観的にみられたのは彼にとっても私にとっても何よりの救いではなかろうか。通常であれば到底冷静に聞ける内容ではないからである。

それから数日後、二人でクリニックへ行った。駅からクリニックまでの道のりは5分くらいであろうか。しかし、その道のりは非常に遠く、心は重く、つらい道なりに感じた。テクテクと二人とも無言のまま歩いていた。私にとっては、まさに死の宣告を受けに歩いているような気持ちであった。主人はどんな気持ちであったのか知らないし、未だかつて聞きたいとも思わない。私自身は平常心を保つだけで精一杯であった。何度も「自分がしっかりしなければ……しっかりしなければどうする……」と心の中でつぶやいていたような気がする。

クリニックに着くと医師はすぐに私たちを部屋へ招き入れ丁寧な説明を始めた。私自身は、医師の説明を一切聞き漏らしてはいけないと思い、医師の許可を得て、医師の説明をテープレコーダーに取り始めた。主人はかなり冷静に聞いているように思えた。もう二人とも泣いてはいなかった。もし、これが最初のがんの告知の場であったら二人とも取り乱していたにちがいない。最初に私自身の口から直接主人に話をしてよかったと思えた。

通常の患者の場合は、がんの告知は医師からなされるが、きっとショックが大きく、頭の中は真っ白で医師の説明など耳に残らないし、とても冷静に聞ける精神状況ではないのではと思う。がん患者の場合は、病状の説明は3回以上行った方がいいと言われているが、実際は、臨床現場ではそのような悠長な時

間はなく 1 回きりの説明で終わっているのではないだろうか。改めてがん告知の環境について考えさせられた。それと同時に医師の仕事の大変さを改めて痛感したしだいである。何人もの患者に同じようがん告知をしていかなければいけないからである。それは医師にとってストレスフルで大変な仕事ではなからうか。私には到底できそうにない。

がん告知を受けた配偶者としての心境をつれづれに書いてみた。今だから振り返って自分の気持ちを冷静に書くことができるし、また書くことで自分自身の心の整理になったように思える。その後、セカンドオピニオンを求めて米国へ行ったり、補完代替医療への取り組み、生活習慣の変容、治療への拒否など、さまざまな紆余曲折を得ながら、このがん告知以降を過ごしてきている。がんはその人や家族の生き方を大きく変える力を持っている。これは良い意味でも悪い意味でもである。がんに実際に出会うことは、人生へのひとつの警告のような気もしている。そして、よく言われることだが「がん患者の家族もまた同じように病んでいるのだと……」。私の人生も大きく変わった。

名古屋大学医学部保健学科助教授（2006年6月末日退職）

沖縄県立看護大学教授（2006年7月2日就任）